

秀吉政権下における徳川家康の「外交」

張 慧 珍

はじめに

徳川家康の外交を論じるさい、江戸幕府開設以降におけるそれが広く議論されている。家康外交は、日本の世界貿易を図ったという見方が多く、朱印船制度や南蛮貿易に注目する研究が多い。近年では、いわゆるスペイン外交・浦賀開港の研究が進んでいる。⁽¹⁾このほか、朝鮮侵略のさいの日明講和に関わる家康の動きがわずかに言及されている。⁽²⁾しかし秀吉政権下における家康の外交についての研究はほとんど行われていない。豊臣秀吉の死後、五大老として権力を握り、外交に取り組んでいったという理解が多い。

本稿で取り上げる家康の「外交」とは、一六〇三年に江戸に幕府を開く以前のそれである。秀吉政権下の家康に関しては関東移封（江戸入府）の研究が多く見られるが、⁽³⁾外交の側面からは十分議論されていないのが現状である。

家康外交は「日明講和」と「関東貿易（浦賀開港）」をもって特筆とすることができる。本稿では、開幕以前の家康「外交」について、秀吉の東アジア支配の構想と対比して家康の中国とヨーロッパを結ぶ関東貿易の構想を考察していきたい。それは家康外交の原点ともいえるからである。

一 秀吉の「唐入」と家康

一五八五年七月に関白に就任した秀吉は、九月、「秀吉日本国事者不及申唐国迄被仰せ付候心二候」と、「唐入」すなわち明に出兵することを宣言した。九州を平定した秀吉は、一五八八年に海賊停止令を出して海の平和を回復し、明との勘合復活を希望していた。翌年秀吉は、「彼方より勘合之儀望申候様有御才覚、其上を以此方被仰付候様可有御調候」と、⁽⁵⁾「彼方」（明）から勘合を望ませ、「此方」（日本）がそれに応じる形で日明勘合を実現したいと述べてい

る。これについて藤木久志氏は、秀吉の勘合の相手国は明であり、渡唐賊船の取締りさえ実現すれば、明側からすすんで勘合の復活をもちかけてくるに違いないと、秀吉の東アジアに関する独自の情勢の読みであると指摘している。⁽⁶⁾一五九二年に「唐人」(朝鮮侵略)を実行した秀吉は、翌年日明講和の条件として「両国年来依間隙、勘合近年及断絶矣、此時改之、官船商舶可有往来事」⁽⁷⁾と勘合復活を求め、その形態として官船商船の往来という公貿易を想定している。⁽⁸⁾また秀吉は東アジアの国々に対して、一五八七年朝鮮、八八年琉球、九〇年蝦夷、九一年インド・ゴアとルソン、九三年高山国(台湾)に「出仕」、すなわち入貢を要求し、日本を中心とする国際関係の形成を構想している。

こうした秀吉の東アジア支配の構想は、一五九二年五月の漢城陥落後、秀吉が関白豊臣秀次に示した左記の三國国割計画にみることができる。⁽⁹⁾

一大唐都へ^(移)叡慮うつし可申候、可有其御用意候、明後年可為行幸候、然者都廻之國十ヶ国可進上之候、其内にて諸公家衆何も知行可被仰付候、下ノ衆可為十増倍候、其上之衆ハ可依仁体事、

一大唐関白右如被仰候、秀次江可被為讓候、然者都之廻^(羽柴秀保)百ヶ国可被成御渡候、日本関白ハ大和中納言・備前宰相、^(宇喜多秀家)兩人之内覚悟次第可被仰出事、

一日本帝位之儀、若^(皇太子良仁親王)宮・八条殿何にても可被相究事、

一高麗之儀者、^(羽柴秀勝)岐阜宰相坎、不然者備前宰相可被置候、然者丹^(羽柴秀俊)波中納言ハ九州ニ被可置候事、

明の北京に後陽成天皇を移し、日本の天皇に皇太子の良仁親王か、皇弟の智仁親王のいずれかを任じる。秀次を明の関白に任じたあと日本の関白には羽紫秀保か宇喜多秀家のいずれかを任じる。朝鮮には羽紫秀勝か、それとも宇喜多秀家を置き、九州には羽紫秀俊(小早川秀秋)を置くという内容である。秀吉自身は明の寧波に居所を定める計画であつた。⁽¹⁰⁾秀吉は明・日本の天皇・関白を任命し、寧波を拠点に東アジアを支配する構想を持っていたといえる。⁽¹¹⁾

秀吉の「唐人」は日本の統一政策と結びついている。秀吉は「唐入」と合わせて「日の本」の支配を構想していた。九州出兵を翌年に控えた一五八六年六月一六日、秀吉は対馬の宗義調に、「就中於日本地者、東日下迄悉治掌、天下静謐事条、筑紫乍見物可被成動座候、其刻高麗國へ被遣御人数成次第、可被仰付候之間、其砌忠節可被申上候」⁽¹²⁾と、日本の統一は、東は日下(日の本)まで支配下に入り、天下静謐になったと述べている。また一五九〇年三月小田原の北条氏を攻め始めた秀吉は、四月一三日には夫人浅野氏に「小たわらをひころしにいたし候へは、^(奥州)大しゆまでひまあき候間、^(満)まんそく申二およはす候」と、小田原平定は奥州までの支配につながると述べている。⁽¹³⁾また、五月一日母親の大政所に「小たわらの事は、^(東)くわんとうひのもとまでも、^(置目)おきめにて候ま、^(千殺)ほしころし二、^(年)申つく可候間、としをとり可申候」と、小田原平定は関東・日の本までの

支配につながると述べている。⁽¹⁴⁾これより、小田原平定は関東・奥州の支配とともに日の本の支配につながるという、秀吉の日本統一の構想がみえてくる。日の本は蝦夷（津軽海峡をはさむ北東北と北海道南部）であったと思われる。小田原を平定した秀吉は七月、「蝦夷島へ被成下御朱印候、不致出仕候ハ、被指渡御人数悉可被刎首候⁽¹⁵⁾」と、蝦夷に出仕を要求した。それに応じて松前の蠣崎慶広が一二月上洛した。⁽¹⁶⁾

「唐人」政策と並行して秀吉が「日の本」に関心を持った理由は、オランカイ（女真族）にあつたと思われる。オランカイでは一五八三年にヌルハチが拳兵し、女真族統一の戦争が起こつていた。朝鮮侵略の冒頭、一五九二年八、九月頃、加藤清正が朝鮮の咸鏡道からオランカイに侵入した。九月、加藤清正は肥前名護屋の秀吉に、オランカイは守護たる者がおらず、在所ごとに要害を構えて「一揆国⁽¹⁷⁾之体」であると伝えた。清正は女真族の統一戦争が咸鏡道を巻き込みながら進行していると認識している。⁽¹⁸⁾

年があけた一五九三年正月五日、秀吉は蠣崎慶広に左記の朱印状を与えた。⁽¹⁹⁾

於松前従諸方来船頭・商人等、対夷人、同地下人、非分義不可申懸、並船役之事、自前々如有来可取之、自然此旨於相背族在之者、急度可言上、速可被加御誅罰者也、

文禄二年正月五日

朱印

蠣崎志摩守トノヘ

秀吉政権下における徳川家康の「外交」

これによると、秀吉は日本人と蝦夷（アイヌ）の交易は松前で行わせ、蠣崎氏にこれまで同様日本の船頭・商人から「船役」の徴集を認め、蝦夷との交易を管理させた。三月松前に帰った慶広は、秀吉から給わつた制書写を揚げ、家臣並びに東西の蝦夷（唐子と日の本）に読み聞かせ、順守することを誓わせた。⁽²⁰⁾秀吉の朱印状によつて蠣崎氏の日本人と蝦夷の交易の統制が可能になった。

朱印状の三日前に蠣崎慶広が肥前名護屋に参陣したのでみて、秀吉は、「高麗国を攻め随へんと欲し在陳せしむるの処、思ひも寄らず狄の千島の屋形遼遠の路を凌ぎ来るの儀、誠に以て神妙なり、高麗国を手裏に入れらるる緯更に疑ひ無しと、而して御歓悦斜ならず、則ち向後は狄の島に於て御用の物相調へらるるためなり」と、朝鮮を征服できるのは間違いない、また蝦夷島で御用の物が手に入ると喜んでいる。これは蝦夷の産物が手に入るといのではない。オランカイの女真族は明と朝貢貿易を行つていた。日本では、オランカイと蝦夷は隣接していると認識していたので（後掲する【図】を参照）、蝦夷を通じて明の品物が入手できると考えたのである。前掲した朱印状は、秀吉が日の本（蝦夷）を通じて明を視野に入れていたことを示唆していると考えられる。

次に、同月七日徳川家康は「慶広朝臣著る所の道服は唐衣（サンタンチミブ）にて奥狄唐渡の島より持ち来りしものなり、家康公見給ひ、珍しき道服と為し、進ず可きの由宣ふの間、即座に之を脱ぎて奉る⁽²²⁾」と、慶広が身にまもつていた唐衣を所望している。山丹は

黒竜河下流域である。「唐衣」は山丹を経由して蝦夷に運ばれていた。家康も、また日の本を通じて明を視野に入れていたことがうかがえる。

このように秀吉の「唐入」政策と「日の本」支配の構想は密接な関係をもっている。

一五九八年八月秀吉の死後、家康の主導で明・朝鮮との講和が模索された。九月、家康らは朝鮮在陣の諸將に、「御無事之様子、朝鮮王子相越候へハ尤候、不相越候共、御調物にて可被相究候、日本御外聞迄候間、御調物多少之段者不入事候間、各相談候て可然様二可被相究候事」⁽²³⁾と、朝鮮との講和条件は朝鮮王子が来日することが重要であるが、それが不可能であれば、調物でも構わない。日本の面目に関わるので、調物が多少不十分でも、講和がうまくいくようにすべきであると述べている。朝鮮との講和は日明講和ともかわっている。

翌年十一月、家康は「摂州大坂の御城西の丸に於て、十一月七日家康公御座間に召され、狄の島の絵図を御覧なされ、北高麗の様体御物語有り、其次を以て当家の系図を尋ね聞し召すなり、此時称号を松前と改む」⁽²⁴⁾と、大坂城西の丸に蠣崎慶広を招き、蝦夷の地図を見て「北高麗の様体」を物語った。「北高麗の様体」とは、北高麗（オランカイ）の女真族の動静のことである。⁽²⁵⁾そして蠣崎を松前に改めさせた。家康は日明講和のために朝鮮の仲介を期待していた。⁽²⁶⁾朝鮮の使節は明への朝貢路である遼東を往来していたが、このころ、

女真族が遼東へ進出する動きを見せていた。女真族が遼東を占領すれば、日明講和が実現できなくなる恐れがあったので、家康にとつて北高麗の情報入手は重要であった。一六〇四年一月、家康は松前慶広に対して黒印状を下した。⁽²⁷⁾松前に来航する日本人に対し松前氏の許可なしに直接に蝦夷人と交易することを禁じた。また松前氏の許可なく、松前から蝦夷地に渡海して交易することを禁じた。ただし、蝦夷人の往来は自由とした。家康は松前氏を通じて蝦夷との関係を掌握したといえる。

家康は秀吉の死後、直ちに「唐入」（朝鮮侵略）を停止した。蝦夷に対する家康の関心は、秀吉の侵略目的と違って明との講和を実現し、貿易関係を結ぶ経済的興味が深かったと思われる。貿易を追求する家康の「外交」について次の節で検討したい。

二 家康の海外貿易への志向

一五九〇年七月、小田原を平定した秀吉は、家康に東海から関東への移封を命じた。それに応じて家康は、八月一日江戸城に入った。家康の関東移封に関して秀吉の敬遠説が指摘されているが、そもそも家康の意思であったという説もある。⁽²⁸⁾このように二つの真逆な説があるが、家康の関東移封は既定の方針であったと思われる。

一五八六年十一月四日、秀吉は上杉景勝に左記のように述べている。⁽²⁹⁾随而家康於無上洛者、三川境目ニ為用心、殿下被成御動座、北

国衆其外江州何も宰相二相添、関東江可差遣旨相定候之処二、家康上洛候て令入魂、何様にも閑白殿次第と申候間、別而不残親疎、関東之儀、家康と令談合、諸事相任之由被仰出候間、被得其意、可心易候、

秀吉は、家康が上洛しなければ、その備えのために三河の境に出兵する。一方、弟の豊臣秀長に北国・近江衆を加えて関東に派遣することを決定したところに、家康が上洛し秀吉に服した。それに對し秀吉は、関東は家康と談合し、諸事を家康に任せることにした。秀吉は小田原平定以前に、家康に関東の諸事を任せると述べているのである。同年六月一六日、秀吉は全国統一について、東は日の本まで静謐になったと述べたことは前述したが、この関東平定を想定した発言であつたと考えられる。

一五八七年十一月、秀吉は「関東・奥兩國迄惣無事之儀、今度家康二被仰付条、不可有異儀候、若於違背族者、可令成敗候」と、関東・奥羽に惣無事令を発し、家康にその執行を委ねた。⁽³⁰⁾翌八八年、家康が出羽米沢の伊達政宗と小田原の北条氏政にそれぞれ送つた書状は、家康が秀吉より関東・奥州惣無事について任されたことがわかる。⁽³¹⁾

秀吉は小田原平定に続いて「三大将、三手にわかつて、奥州・津輕・日の本まで、さしつかはされ、そのうへ、国々御検地おほせつけられ」と、浅野長吉・石田三成・大谷吉継の三人を奥州・津輕・日の本まで遣わし、さらに奥羽の検地を命じた（奥羽仕置）。秀吉

の「奥州仕置」に反発して、一五九一年三月南部の豪族九戸政実が南部信直に對し軍事行動を起こした。南部信直の訴えを受けた秀吉は、

今度九戸一揆ノ注進ニ付退治ノタメ軍勢ヲ定メラル（略）中二モ九戸ハ大勢ナルヨシ、南部信直訴ヘケレハ其外大軍ヲ指向フ人々ニハ御猶子三好治兵衛尉秀次公、徳川大納言家康公、相從フ人々ニハ浅野彈正少弼長政、石田治部少輔三成、（略）津輕松前ノ勢モ一ツニ成テ八戸ヨリ押寄ル松前志摩守ハ蝦夷三百人ニ毒矢ヲ持タセ催シ来ル、（略）

と、秀次、家康等を出兵させ、九戸政実を討伐した。⁽³²⁾蠣崎慶広も蝦夷三〇〇人に毒矢を持たせて、九戸城攻めに参陣した。これによつて蠣崎氏は蝦夷島の唯一の支配者たることを天下に示した。⁽³⁴⁾

一五九五年七月に家康・毛利輝元・小早川隆景は秀吉宛の起請文を作成し、「坂東法度置目公事篇、順路憲法之上をもつて、家康可申付候、坂西之儀者、輝元并隆景可申付候事」と述べた。⁽³⁵⁾すなわち、東国の政務は家康、西国の政務は輝元と隆景という秀吉政権の全国統治の担当範囲を定めている。翌年冬、蠣崎慶広と慶広の嫡子盛広が江戸に参勤し、初めて家康に謁した。⁽³⁶⁾東国の政務者・家康のもとに蝦夷の蠣崎氏が訪ねてきたのである。前述のとおり、一五九九年に家康は蠣崎氏の系図を尋ね、蠣崎を改めて松前と名乗らせた。これは、家康が蠣崎氏を松前の支配者として認めたことを意味する。

以上のように家康は、秀吉の全国統一の過程で小田原平定後、関

東に移封され、東国の政務担当者となった。家康は、関東に止まらず日の本（蝦夷）まで視野に入れていたことがわかる。それは日明講和、すなわち日明勘合の実現を視野に入れていたのである。

次に、一五九六年のサン・フェリペ号、一六〇〇年のリーフデ号の日本漂着を契機に家康は、江戸を拠点とした関東貿易（浦賀開港）を模索していた。詳しくは次節で述べるが、ここでは、その構想の背景になる一六世紀における関東の唐船交易についてみてみたい。

一五四九年・六六年・七六年の唐船に関わる史料をみてみよう。先に、北条氏康が滝山城主の真月斎道俊（大石定久）に送った書状⁽³⁷⁾である。

熊以使申候、如先日申候松山普請、当月不致而者、秋末者、敵方遺意も可有之候間、不図存立候、三日之内当地を可打立候、涯分堅固ニ可致候条、可御心易候、并高松筋へ散動之事、藤田色々令懇望候間、一動申付可打散存候、御人数之事御大儀候共、御用意肝要候、就中去月下旬伊豆奥号御蔵島小島江、自築紫薩摩船流寄候、破損無紛候間、荷物為取之前後無之様ニ候間、分国中大社御修理之方ニ過半加之候、六所江も致寄進候、以日記岩本隼人申付進し神主本願ニ被相談、彼荷物をは別而可然人体ニ被預置、一方之御修理ニ罷成候様ニ可被仰付候、次ニ雖輕微候、唐物候間、唐紙百枚・竹布五端進候、

七月二十一日

氏康（花押）

謹上 真月斎

この書状は年欠であるが、一五四九年と推定されている⁽³⁸⁾。傍線部によると、六月下旬に伊豆の奥の御蔵島に築紫（九州）より薩摩船が漂着した。その荷物を没取して北条氏領内の大社の修理のために過半を費やし、相模国の総社六所神社にも寄進した。次に輕微であるが、唐物があるので唐紙一〇〇枚・竹布五反を大石定久に贈った。関東に唐物が出まわっていたことがわかる。薩摩船の漂着から考えれば唐船が関東に渡航することは不可能なことではなからう。日本列島の太平洋側に黒潮が流れている。薩摩船は、黒潮に流されて伊豆に漂着したと考えられる。

一五六六年については、「唐人来朝之事」⁽³⁹⁾に、

永祿九年の春、三崎の浦へ唐船着津、錦繡の織物、種々の焼物、沈香、麝香、珊瑚、琥珀の玉、あらゆる売物持来る。其比関東富貴にて、悉諸人買取、売買の利を得て帰国しける。其中に唐人、あまた「かゝる目出度所にこそ住べけれ」とて、不能帰国、当所に留る。則小田原に居住町屋を給はり商人となる。今に其子孫数多小田原に在とかや。

と、三崎の浦に唐船が来航し、錦繡の織物、種々の焼物、沈香、麝香、珊瑚、琥珀の玉などの品々を積んできた。関東は富貴であり、諸人が悉く買い取ったので商売の利益を得て帰国した。そのなかに一部の唐人は帰国せず、三崎の浦に残った。唐人は小田原に居住の町屋を給わり、商人になった。この時期から小田原に唐人町が形成

されたといわれている。⁽⁴⁰⁾

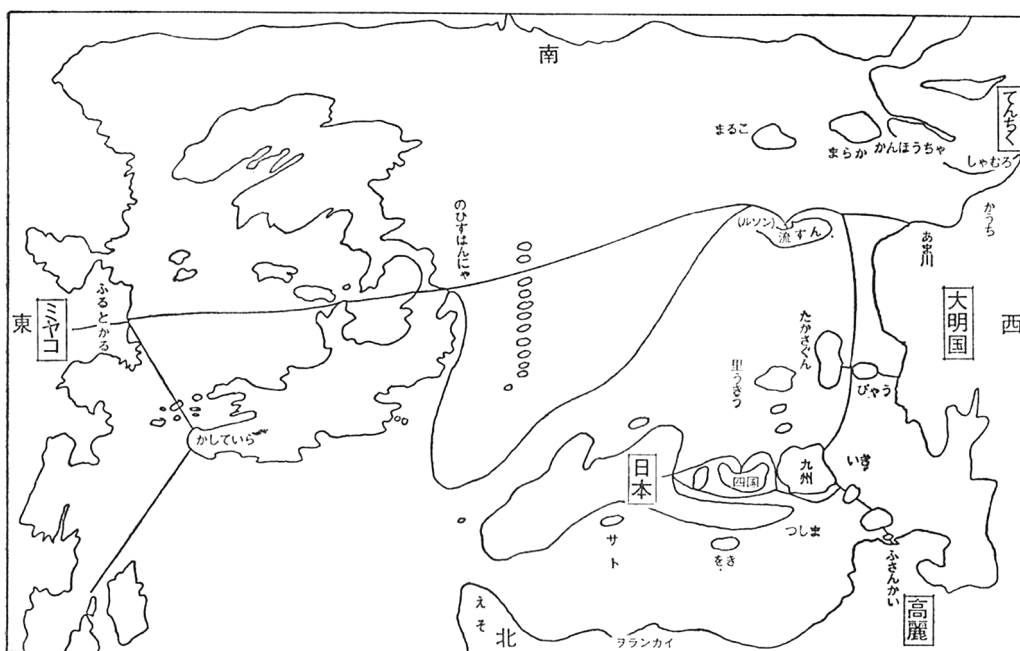
その前年、北条氏康の弟為昌の菩提寺本光寺に唐物が寄進された。「北条家寄進物注文」⁽⁴¹⁾に、「本光寺工寄進注文」として「唐椀一流、鍮鉢盆拾枚、燭台式本、樽二荷」をあげている。唐椀・鍮鉢盆は唐物である。また一五六七年の「北条氏康判物写」⁽⁴²⁾に、「香林寺什物内永高売捨物、今度尋得注文」として、「唐之磬一、同鈴一、推鉢二双、鍮花瓶一、同燭台一、同香炉一、茶釜同風呂共一、唐茶壺一」をあげている。北条氏康は小田原の香林寺が売却した（唐物）を尋ねだして購入したのである。⁽⁴³⁾

一五七六年に関して「北条五代記」⁽⁴⁴⁾には、

天正四年の比ほひ、三官と云唐人、氏政の虎の印判をいたゞき、もろこしに渡り、三年目の戌寅七月二日に黒舟三崎の湊に着岸す。唐人此湊を見て「黒舟千艘つなく共せばからず、をよそから国にも有べからず」といふ。然に氏政の檢使として、安藤豊前守といふ人、三崎へ来て、唐人と日本の口通出合、売買の躰ゆゑ、しくぞ見えける。（中略）当浦関東無双の湊たるによつて、氏直舟大将梶原備前守頭とし、数百艘をかけをく、

と、三官という唐人が北条氏政から虎の印判を給わって中国に渡った。三年目の一五七八年、三浦の三崎に黒船に乗って来航した。この黒船は東南アジアで活動しているポルトガル船やスペイン船である。黒船に同乗していた唐人が三崎の港をみて「黒船千艘くらい入港できる港は唐国にもない」と述べた。唐人と日本の口通（通事）

図 サン・フェリペ号航海図写（模写）



* 東西南北の四方位は反対になっている。

紙屋敦之『幕藩制国家の琉球支配』（校倉書房、1990年）81頁の図2を参照した。

が出合つて商売する様子はすばらしくみえる。三崎は関東無双の湊であった。ちなみに、当時ポルトガル人は、一五五七年明よりマカオの居住を許され、貿易を掌握していた。スペイン人は、一五七〇年マニラを征服し、七一年ルソン（フィリピン）総督を設置した。中国と貿易をするために、ルソン総督フランシスコ・デ・サンデは一五七六年六月にスペイン国王およびメキシコ副王に書簡を送り、中国派兵を献策していた。⁽⁴⁵⁾

このように三浦三崎は唐船交易が行われ、海上への外延性が優れていたところであり、一六世紀の関東に唐船・唐物についての関心が高く、唐人の往来と唐物の流通を確認することができる。

一五九六年七月、アカプルコ（メキシコ）に渡航するためにマニラを出航したスペイン船サン・フェリペ号が土佐浦戸に漂着した。日本側は、取調中にサン・フェリペ号の航海図を写した（【図】参照）。その航海図の写にはルソンとメキシコを結ぶ航路が描かれていた。スペイン船は関東の東方海上を航行していたのである。このサン・フェリペ号の漂着が家康に関東貿易を志向させたと思われる。これについては次節で詳しく述べたい。

三 関東貿易の構想

秀吉は、「唐人」政策の一環として、一五九一年にルソンに出仕を要求した。秀吉は商人原田喜右衛門を遣わし、総督ゴメス・ペレ

ス・ダスマリーニャスに、「不移時日、可偃降幡而来服、若匍匐膝行於遲延者、速可加征伐者必矣」と、ただちに降伏して服従すべきである。もしぐずぐずして遅延すれば、速やかに征伐すると、日本への出仕を要求したのである。⁽⁴⁶⁾これがマニラ交渉のはじまりである。

ゴメスは出仕の要求を受け入れなかったが、マニラのスペイン人の一部は、「日本との取引なり貿易は、ポルトガルにとってのマカオと同様にマニラのために大いなる利益を齎すには違いない」と考えた。一方、聖職者らは布教のために日本とシナに渡ろうと考えていたので、「この使節派遣を口実に自分たちの目的を達成するために使節を派遣すべきである」と考えた。⁽⁴⁷⁾そこでゴメスはポルトガル人の日本での貿易独占の牽制や布教のために使節派遣を決意した。初めて日本に派遣されたマニラのスペイン人は一五九三年のフランシスコ会のペドロ・バウンティスタであった。この派遣団は六月、肥前守護屋で秀吉に謁見した。このとき、家康も名護屋に滞在していた。

一五九六年、サン・フェリペ号が土佐浦戸に漂着したことは前述した。これをきっかけに秀吉によるキリスト教の迫害が厳しくなり、宣教師やキリシタンの二六人が長崎で処刑された。翌年五月、この殉教者の調査のためにルソン総督ドン・フランシスコ・テリヨ・デ・グスマンの使節は日本に派遣され、大坂城で秀吉に謁した。金銀の宝物や高価な衣服などとともに、象や象使いも贈り、秀吉の歓心を買った。同年、日本に潜入した修道士三人（バードレ、ルイス、

ゴメス)が都(京都)で捕まり、マニラに送りかえされた。⁽⁴⁸⁾このさい、家康はパードレを招き、「日本に滞在する許可を与え、さらにまたマニラの総督に対して挨拶の辞を取り交わす使節としてパードレを派遣して、またわが王国には便利な湊が多いから商品を積んだ船を一艘送つてよこすようにパードレから頼んでほしい」と頼んだ。⁽⁴⁹⁾これにより、家康が秀吉のようにキリシタンの迫害を好んでいなかったというイメージがスペイン人に与えられた。これについては、一五九八年ルソン臨時総督であったドン・ルイスが総督テリヨに台湾占領を勧告するとともに、東南アジアを広く支配下に置くべきであるという提案のなかで家康について次のように述べている。⁽⁵⁰⁾

関東の国王(Rev de Quanto)(徳川)家康(Yaso)は、関白(豊臣秀吉)を除いては日本最強の諸国王の一人で、全国統治と主権において関白の後継者となるであろう。この者が商品を積んでヌエバ・エスパニーヤへ船を派遣するためにマニラ総督の許可書を得るという条件で、非常に広大な彼の領土である関東に教会を建てさせ福音の教えを説かせると申し出ている。これに関して二つの問題が生じる。主要な第一の問題は、かの大国における福音の説教と改宗である。人々がキリスト教徒になるのを国王が希望していることが判れば、皆がそうなるであろう。したがってその国王自身がキリスト教徒になるように努力することが(問題である)。何故ならこれほど強力な国王をキリスト教徒にすることは極めて重要であろうし、期待されるよ

うに、もし関白の国を継ぐならば更に結果が大きであろう。第二の問題は、この国王(家康)とスペイン人との貿易によって交友関係が確立することである。これは物質上でも宗教上でも、特に貿易において大いなる利益を齎すであろう。

ルイスは、家康を秀吉につぐ最強の「国王」すなわち大名であり、秀吉の後継者になるとみていたことに注目する必要がある。こうした家康をルイスは宣教の相手としてみており、家康に好印象を持っている。特に傍線部には、家康がヌエバ・エスパニーヤ(メキシコ)船を派遣するためにルソン総督の許可証を得るという条件で関東に教会の建設を許可すると述べている。

一六〇〇年三月一六日、オランダ船リーフデ号が豊後臼杵に漂着した。この船には、イギリス航海長ウィリアム・アダマス、オランダ人船人ヤン・ヨーステンらの二四人が乗船していた。四月、家康は大坂城でアダマスを引見した。リーフデ号の乗務員は抑留されて、リーフデ号は堺に廻航された。五月末、家康はアダマスの抑留を解き、リーフデ号とともに関東へ送らせた。一六〇二年頃、家康はアダマスに江戸日本橋辺りに、ヨーステンには八代洲河岸(現在の八重洲)辺りにそれぞれ屋敷を与えた。さらにアダマスは、後述する大型船舶を完成した功労が認められ、一六〇五年相模国三浦郡逸見に領地を与えられた。そして領地名にちなんで三浦按針と改名した。アダマスとヨーステンは家康の外交・貿易の顧問として活躍した異国人である。特に浦賀開港に関わる人物である。

サン・フェリペ号に乗船していた修道士フライ・ヘロニモ・デ・ヘススは、逃亡していたが、秀吉の死後、都（京都）に戻ってきた。ヘススは、家康の家臣を通じてスペイン王がメキシコとペルーの領土を持っていることと、スペイン人と友好関係を結べば家康に有益があることを伝えた。⁽⁵¹⁾ このヘススの発言によって家康のスペイン人に対する浦賀貿易の交渉が本格的に展開されたと思われる。こうして家康は江戸にアダムスとヨーステンの外交顧問を置き、スペインに対する貿易体制を具体化していった。

家康の浦賀開港に対する執念は強く、スペイン人の宣教行為と対立しながらも、浦賀貿易への交渉を展開していた。一六〇二と三年ルソン総督は家康の望みに応じ、サンチアゴ号に貨物を積み、マニラより浦賀に渡航させたが、入港できず豊後に着岸した。家康はこれと別に、一六〇四年関西（堺）に停泊中のマニラのスペイン船を浦賀に廻航させ、初めてスペイン船が浦賀に入港した。⁽⁵²⁾ 同年、家康はアダムスにヨーロッパ式の大洋航海用船舶を建造するよう命じ、翌年に八〇トン、一六〇七年に一二〇トンの船を完成させた。この船は、一六〇九年房総半島海岸に漂着したスペイン船サン・フランシスコ号の帰還用の船として翌年に用いられた。⁽⁵³⁾ そしてこの船に家康は京都商人田中勝介を便乗させた。一六一一年メキシコ総督派遣の使節とともに田中勝介が帰国した。

このように、浦賀貿易に対する家康の企図はどこにあったのか。時代を少し下るが、次のことから確認することができる。一六一三

年に伊達政宗が支倉常長をローマ教皇とスペイン国王に派遣した際、使節としてフランシスコ会修道士ルイス・ソテロ、ビスカイノの三人を同行させた。この三人の使節がメキシコ総督に呈した覚書、「閣下が我等の為にイスパニヤ国王陛下・インドインド顧問会議并に同会議長に宛て、書き送らるべきことの覚書」⁽⁵⁴⁾をみてみよう。この覚書には、スペイン国王に浦賀貿易の利益について次のように記されている。⁽⁵⁵⁾

陛下が国益と貿易の便宜との為め、全領土に於て努めらるゝところは、商品の輸出入に際して、金銀の流出を防ぐこととなり、然るに、現在、支那の貿易に於ては、金銀多く国外に流出す、日本の貿易に於ては、之に反し、金銀貨は一レアルたりとも流出することなく、将来も亦し然るべし、その理由の一ハ、彼の国に於ては金銀多くして、その求むるところは、彼の地に缺乏せる商品のみなることなり、又一の理由は、この地のペソは、彼の地のペソと同価に通用するを以て、ハレアルに当る一ペソ毎に、約一レアルの損を生ずる事なり、今よくこの問題を攷究して、国家の利益を図るに、多額の銀のこの地方より、支那に向ひて流出することを防ぎ、又支那商品の缺乏することなからしめんの為めには、支那の商品は、日本を経て、新イスパニヤに輸入せしめ、その売上高は、銀貨にて持ち帰らず、羅紗、粗羅紗、カルサイ、ペルベトアン、駱駝の毛織物、薄き羊毛織物、オランダの麻織物、ルーアン（フランス）の錦織物、イスパニ

ヤの麻織物、毛布、絹物類、カステリヤ（スペイン）及びミラ
ン（イタリア）の織物、葡萄酒、乾葡萄、アmendó、藥種類、
鏡、製革、其他、フランデル地方（フランドル）の珍奇なる品
を携へ歸らしむべし、右の商品は、日本に於ては多くの価格を
有するを以て、この貿易に従事する商人は、日本に於て、右の
諸品を販売し、その売上高を以て、絹、その他、支那商品の買
入に供し、之を新イスパにヤに於て販売して、二重の利益を得
べし、然も之が為め、国外に一レアルの流出をも見ることなく、
イスパニヤの税関に於ては、輸出税の収入を増加し、新イスパ
ニヤに於ては、売買盛なるが為め、国庫の収入を増加すべし、
又、日本貿易に従事する商人は、自ら船を造るに至るべく、日
本に於て、支那の商品の需用増加するに連れ、之を輸入するマ
ニラの人、及び、マカオのポルトガル人の利益も、亦、増加す
べし、而してこの買入は、日本の金銀を以てし、更にイスパニ
ヤの貨幣を出すことなし、（下略）

スペインは、国益と貿易の便宜のために、メキシコにおいて努め
ることは、商品の輸出入の際に金銀の流出を防ぐことである。現在、
中国との貿易において金銀が多くメキシコから流出する。日本との
貿易においては金銀の流出がない。その理由の一つは、日本には金
銀が多くて、日本が求めているのは欠乏している商品のみである。
もう一つの理由は、為替上、スペイン側が損するので、これからよ
く攷究して国益を図るに、多額の銀がメキシコから中国に流れるこ

とを防ぎ、中国商品を欠乏させないためには、中国商品は日本を経
てメキシコに輸入し、その売上高は銀貨にてスペインに持ち帰らず、
ヨーロッパ諸国から品々を仕入れて、それをメキシコに持ち帰らせ
る。これらの商品は日本で多くの利益が得られるので、この貿易に
従事する商人は、日本で販売し、その売上高で絹やその他の中国商
品を買入し、これをメキシコで販売し、二重の利益が得られるだろ
う。このような利益のため、メキシコの外に一レアルの銀も流出す
ることなく、スペインの税関においては、輸出税の収入を増加し、
メキシコにおいては、売買を盛んにするため、国庫の収入を増加す
るだろう。また日本貿易に従事する商人は自ら船を造り、日本で中
国商品の需用が増加するにつれて、中国商品を輸入するマニラ人、
及び、マカオのポルトガル人の利益も、増加するだろう。こうして
この買入は、日本の金銀をもって支払い、スペインの貨幣をつかう
ことはなくなると述べている。

スペインは浦賀港を通じて中国との貿易を企てていたのである。
そして日本側もそれを承知していたと考えられる。スペインは、既
存の中国貿易においてメキシコ銀が多量に流出することはスペイン
の国益にとってよくないと思っていた。中国に流れていくメキシコ
銀を防ぐために日本での中継貿易に着目し、日本を経由する中継貿
易を通じて中国貿易の利益をあげようとした。

家康はマニラ交渉＝浦賀開港と並行して日明講和（日明勘合）を
追求していた。一六〇〇年一月家康は、島津義弘・忠恒（家久）と

寺沢広高に命じて明将茅国科を明に送還し、「本邦朝鮮作和平、則
 到皇朝亦如前規以金印勘合可作往返」⁽⁵⁶⁾と要求した。この書簡は家康
 が西笑承兌に起草させた。金印は日本国王を、勘合は公貿易を示唆
 している。⁽⁵⁷⁾家康は日本国王として日明貿易を希望していたのである。
 また、一六〇三年江戸幕府を開いた徳川家康は長崎を直轄地とし、
 長崎奉行として小笠原一庵を派遣した。当時長崎奉行は長崎に常時
 しておらず、異国船（唐船・南蛮船）が来航し、出航するまでの貿
 易期間のみ江戸から派遣された。長崎行政を務めるより貿易担当者
 という性格が強かった。さらに一六〇五年から小笠原一庵の代わり
 に長谷川左兵衛が任命された。

一六一〇年、本多正純が南京商人周性如に託して福建総督に送っ
 た書簡には、家康は明船に対し長崎を貿易港とし、明より「勘合之
 符」を賜れば、日本よりそれを「大使船」に持たせて派遣する。
 その他の商船には「御印書」を持たせると述べている。⁽⁵⁸⁾家康は明の
 「勘合之符」に対して日本の朱印状を対置させ、明と対等な日明関
 係（日明勘合）を構想していた。

話をスペイン側に戻すと、スペインは日本の長崎を経由する中国
 商品の物流ルート（「中国―日本」）を、「浦賀―メキシコ」とつな
 げ、日本を中継地とする東西貿易ルートを企図していたことであろ
 う。すなわちスペインにとって浦賀港は、「中国―日本（長崎）」と
 「ルソン・マカオ―日本（浦賀）―メキシコ（スペイン）―ヨーロッ
 パ」の二つの貿易ルートの結節点であった。

おわりに

秀吉は「唐入」を通じて、東アジアの支配を構想していた。こう
 した秀吉の侵略的対外政策に対し家康は日明講和、すなわち日明勘
 合を追求していた。同時に、家康はマニラと交渉し、関東貿易（浦
 賀開港）を志向した。そのきっかけになったのは、サン・フェリペ
 号の航海図写とヘススの発言にあったと考えられる。これによって
 家康は、太平洋の向こうのメキシコとの貿易の可能性に目覚めたか
 らである。従来の中国を中心とする東アジアの貿易関係から日本を
 仲介として中国とメキシコ・ヨーロッパをつなぐ貿易ルートの開拓
 が、家康の浦賀開港の構想であったことである。浦賀は江戸の外港
 として位置づけられていた。浦賀貿易に対する家康の志向は、時代
 がくだるが、一六一三年伊達政宗が支倉常長をスペイン使節団とし
 て派遣した際、使節として同行させたフランシスコ会修道士ルイス、
 ソテロ、ビスカイノの三人がメキシコ総督に呈した覚書の内容から
 確認することができる。

註

- (1) 鈴木かほる「徳川家康の浦賀開港とその意図」〔『神奈川地域史研究』一
 二号、一九九四年〕。同『徳川家康のスペイン外交』（新人物往来社、二〇
 一〇年）。山本博文『江戸時代の国家・法・社会』（校倉書房、二〇〇四

年)。松田毅一訳『一六〇一七世紀日本・スペイン交渉史』(大修館書店、一九九四年)。鈴木有子『鎖国』政策の進展とスペイン』『日本・スペイン交流史』(れんが書房新社、二〇一〇年)。

(2) 仲尾宏『徳川家康と朝鮮・試論』『朝鮮義僧将松雲大師と徳川家康』(明石書店、二〇〇二年)。

(3) 家康の江戸移封に関して、田中義成氏『秀吉時代史』講談社、一九二五年)は、秀吉の敬遠説を述べているが、北島正元氏『江戸時代史』雄山閣、一九四一年)は、家康の存分に任されたことであると述べている。これに対し、川田貞夫氏(『徳川家康の関東移封に関する諸問題』『徳川氏の研究』吉川弘文館、一九八三年)は、天下統治の片棒として家康を評価した秀吉の熟慮の結果であると指摘している。水江漣子氏『家康入国』角川書店、一九九二年)や岡野友彦氏(『家康はなぜ江戸を選んだか』教育出版株式会社、一九九九年)は、家康の意思であったと述べている。

(4) 岩沢原彦『秀吉の唐入りに関する文書』(『日本歴史』一六三号、一九六二年)七三頁。

(5) 鹿児島県維新史料編さん所編『鹿児島県史料 旧記雑録後編二』(鹿児島県、一九八二年)五七一号。

(6) 藤木久志『豊臣平和令と戦国社会』(東京大学出版会、一九八五年)二二九頁。

(7) 『太閤記』近藤瓶城編『改定史籍集覧』第六(臨川書店、一九九〇年)三七六頁。

(8) 田中健夫『勘合符・勘合印・勘合貿易』(『日本歴史』三九二号、一九八一年)一一頁。

(9) 『古蹟文徴』(前田尊敬閣文庫蔵)。

(10) 『組屋文書』福井県編『福井県史』資料編九中・近世七(福井県、一九九〇年)六号。

(11) 三鬼清一郎『戦国・近世初期の天皇・朝廷をめぐる』(『歴史評論』四九二号、一九九一年)五六頁。

秀吉政権下における徳川家康の「外交」

(12) 武田勝蔵『伯爵宗家所蔵豊公文書と朝鮮陣』(『史学』第四卷三三、一九二五年)七六頁。

(13) 日下寛編『豊公遺文』(博文館、一九一四年)二四八頁。

(14) 註(13)の二五二頁。

(15) 『武徳編年集成 卷三九』海保嶺夫編『中世蝦夷史料補遺』(北海道出版企画センター、一九九〇年)一八四頁。

(16) 榎森進『北海道近世史の研究』(北海道出版企画センター、一九九七年)一八三〜一八六頁。

(17) 『加藤清正文書集』熊本県編『熊本県史料』中世篇第五(熊本県、一九六六年)一五号。

(18) 紙屋敦之『幕藩制国家の琉球支配』(校倉書房、一九九〇年)五七〜五八頁。

(19) 『福山秘府 卷之八』北海道庁編『新撰北海道史』第五卷史料一(北海道庁、一九三六年)八三頁。

(20) 『新羅之記録(下巻)』北海道編『新北海道史』第七卷史料一(北海道、一九六九年)四五〜四六頁。

(21) 註(20)の四二〜四三頁。

(22) 註(20)の四四頁。

(23) 豊臣氏四大老連署状。大阪城天守閣編『五大老―豊臣政権の運命を託された男たち―』(大阪城天守閣特別事業委員会、二〇〇三年)一〇四号。

(24) 註(20)の四六頁。

(25) 註(18)の紙屋著書八一〜八二頁。

(26) 辻善之助校訂『異国日記』(『史苑』第三卷第六号、一九三〇年)七五頁。

(27) 『松前家文書』海保嶺夫編『中世蝦夷史料』(三一書房、一九八三年)七三一号。

(28) 註(3)を参照。

(29) 羽柴秀吉書状。註(23)の七八号。

(30) 藤木久志『豊臣平和令と戦国社会』(東京大学出版会、一九八五年)六四

- (31) 中村孝也『新訂徳川家康文書の研究』上巻（日本学術振興会、一九八〇年）七二五、七二八頁。
- (32) 「太閤さま軍記のうち」中村孝也・北島正元他編『太閤史料集』（人物往来社、一九六五年）一八二～一八六頁。
- (33) 註（15）の「奥羽永慶軍記 卷二」一九〇頁。
- (34) 浪川健治『近世日本と北方世界』（三省堂、一九九二年）一五～一六頁。
- (35) 註（23）の九一号。
- (36) 註（15）の「松前家記」「松前年々記」一九九頁。
- (37) 杉山博・萩原龍夫編『新編武州古文書 上』（角川書店、一九七五年）六七四頁。
- (38) 英太郎「後北条氏領国への唐船来航と小田原唐人町形成の背景について」『府中市郷土の森紀要』一〇号、一九九七年 一三頁。
- (39) 萩原龍夫校注「北条記 巻第四」『北条史料集』（人物往来社、一九六六年）一二七頁。
- (40) 註（38）の英論文。柴辻俊六「後北条氏の外交と小田原唐人町」『日本歴史』七四九号、二〇一〇年。両氏は、一六〇七年朝鮮通信使の副使慶暹の『海槎録』に小田原に唐人村があったという記事から裏付けている。
- (41) 小田原市編『小田原市史』史料編中世二（小田原市、一九九一年）六一頁。
- (42) 註（41）の六六一～六六二頁。
- (43) 中丸和伯「後北条氏の発展と商業」『後北条氏の研究』（吉川弘文館、一九八三年）三一八頁。
- (44) 註（39）の「北条五代記」三四八～三四九頁。
- (45) 高瀬弘一郎『ギリシタン時代の研究』（岩波書店、一九七七年）七七頁。
- (46) 村上直次郎訳註「異国往復書翰集」『異国往復書翰集・増訂異国日記抄』（雄松堂書店、一九六六年）三〇頁。
- (47) 註（1）の松田訳書二七頁。
- (48) 佐久間正他訳註『アピラ・ヒロン日本王国記』（岩波書店、一九七三年）二七一～二七四頁。
- (49) 註（48）の二八〇～二八二頁。
- (50) 註（1）の松田訳書一五五頁。
- (51) 神吉敬三他訳註『モルガ フィリピン諸島誌』（岩波書店、一九六六年）一八四～一八五頁。
- (52) 鈴木かほる『徳川家康のスペイン外交』（新人物往来社、二〇一〇年）八〇頁。
- (53) 松田毅一「慶長遣欧使節―徳川家康と南蛮人―」（朝文社、一九九二年）八四、九九頁。
- (54) 「西班牙シマンカス文書館文書」東京大学史料編纂所編『大日本史料 第二編之二二』（東京大学出版会、一九七二年）四五頁。
- (55) 註（54）の五三頁。
- (56) 鹿児島県維新史料編さん所編『鹿児島県史料旧記雑録後編三』（鹿児島県、一九八三年）一〇二五号。
- (57) 註（18）の紙屋著書三〇五頁。
- (58) 辻善之助校訂「異国日記」（『史苑 第一巻第二号』一九二八年）二二頁。